

子どもの力を引き出し、伸ばす地域力を

子どもたちは、いつの時代も未来を担うエネルギーにあふれた存在です。しかし、いじめの問題など育ちに影を落とす出来事が、子どもたちを取り巻いています。子どもが自分らしく前向きに生きることができると、何が必要かを話し合いました。

いじめ対策、 どう考える？

岩本：いじめの問題ですぐに警察が出てくると「これでいいのかな？」と違和感を感じます。

日向：加害者も被害者も子どもである中で、犯人を見つけ出して罰するだけでは解決にはならないですよ。

平野：私は今まさに小学生の子育て中ですが、子どもの声を聞かず、おとなが「こういうことはいじめです」と一方向の説明で済ませます。



市議会議員 岩本ひろ子

はよくないですね。

岩本：東京都が実施したいいじめに関する調査では、小平はいじめとした件数が多く、それはいいねいに見た結果でもあるけど、問題はその先をどうするかですよ。

平野：いじめかどうかを決めるのは当事者だし、見ている子どもたちも実はわかっていっていると思う。

日向：深刻だなと思うのは、いじめをおかしいと感じても言い出せない子が多いこと。大人がだめなことはだめと毅然とした態度をとるのは大事だけど、最終的に子どもたちの人間関係を代わってあげることができないわけだから。

岩本：「なんかへんだな」と思っている子どもの力をどう引き出してあげるかが大事ですよ。

いじめは絶対にいけないけど、けんかして仲直りしたり、関係性のさじ加減みたいなものを子ども時代に体験することも大事。

平野：大人が子どもとの人間関係に過敏になりすぎると、友だち同士

の関係も壊れていく気がする。少し遠巻きに子どもたちを見て、大事なときに手を貸してあげるのがいいのかなと思います。

日向：安全を確保する環境をつくるのは大人の責任だけど、あまり介入しすぎてもいけないですね。

もつと子どもを

中心に

平野：子どもだけの世界がなくなっている。物は豊かになっただけで遊び場や時間など子どもが育つ上で当然必要なものが奪われている気がしてなりません。

岩本：もつと子どもがいろんなことに参加して、力を引き出せるといいと思う。「子どもの権利に関する条例」ができた北海道の幕別町では、以前から日常的に子ども参加をすすめていて、視察に行った小学校では遠足の日程や行き先を子どもたちが決めていました。時



市議会議員 日向みさ子

間はかかるんだけど、自分の意見を言い、人の意見も聞くことにみんな慣れていく感じでした。

日向：ゆとり教育がなくなったり、いろんな意味で教育は長期的視点をもてなくなっている。子どもを「待つ」ということが学校も親もできていないのかもしれないね。

平野：「人間関係のつくり方」は勉強してわかるものではないですよね。実体験の中で小さな失敗を繰り返しながら身につけていく。そのことを親も理解しないと。

岩本：児童館や青少年センターなどを活用して、子どもたちとの関

わりをもっとつくっていきけるとい
い。活動を通して知り合った身近
なおにいさん、おねえさんのよう
な人に悩みを打ち明けられること
がきたり……。子どもは地域で育つ
とはどんなことか、いまこそ確認
していくべきですよ。

平野：先生や親には言えないけど、
この人になら言えるってこと、子
どもにはありますよね。

日向：学校が地域に開くといつた
ときに、学校的な価値観を外に持
ち出すのでなく、そうでないもの
を学校に持ち込む。例えば近所の
面白いおじさんが教科書には載っ
ていないことを教えてくれるとか。

学校だけに

おまかせにしない

岩本：いまはいろんなことを学校
に求めすぎているのかも。

日向：「地域」には、学校に関わ
ってくれる人はもちろん、子ども
に関わる市民グループやNPOや
社会福祉法人も入るはず。学校だ
けでない地域資源をどうつなげる
かですよ。

岩本：学校だけが子どもを抱え込
んじゃいけない。そして、親も地
域も学校だけにおまかせしないで

一緒に動いて育てていくという姿
勢が必要ですね。

平野：これだけ家族に関わる問題
が複雑化している中で、先生や学
校も相談できるところがいりませ
ね。

話し合いの場をつくるのも、先
生だけで難しいなら市民グルー
プの力を借りるとか。

日向：自分の子ども時代を振り返
っても話し合う体験は大事。いじ
めも完全に解決はしなくても、関
係が変化したりはあったから。

岩本：自分たちで解決していく力
を子どもはもっている。それは大
人に信じてもらえているという実
感がないと引き出せないと思う。
そんな自尊感情を持てる社会を私
たちはつくっていききたいですね。

(2012年10月7日)



市議会議員 平野ひろみ

窓

親離れ、子離れ？

柴尾 裕美



娘が小一になって間もない頃のこと。

朝、急に学校を休むと言った。引越して間もないこともあり、無理に学校へ行かせなくてもいいなと思った。しかし、その日は仕事を休むことができなかった。何度も「大丈夫？」と確認して、一人置いて仕事へ行った。帰ると「おかえり」とニコニコ迎えてくれた。翌日、何事もなかったように学校へ行った。その夕方近所のおばあさんが、たずねてきて「昨日、一人で玄関の前にいたからしばらくお話したのよ。」とおしえてくれた。その方は学校を休んでいることにはふれず話し相手をしてくれたようだった。

娘は、何かふっきれたように「一人はつまらないね」と言った。一人である時間とそのさびしさをおぎなってくれる人がいる時間を過ごし、外へ出て行く勇氣をもらったのかなと思う。地域に住む人とのさやかな関わりの中で子どもは成長していくことを親としても学ぶことができた。

その娘も高校卒業後オーストラリアへワーキングホリデーに旅立った。出発した当初、まめにきたメールも最近はほとんど来ない。たのみごとのメールもなくなった。

先日、親心から「生活費は大丈夫？」のメールに「心配ないよ。自分のことは自分で決めたいしね」。自立した娘の言葉にホッとするよりさびしい気持になり、ふと、幼い頃のことを思い出した。